

序

骨粗鬆症リエゾンサービスとは、現在、世界の多くの国々で実践されている骨粗鬆症診療に関わる多職種による骨折予防のための支援活動のことで、この活動の調整役（コーディネーター）が骨粗鬆症マネージャーである。リエゾンサービスとは「連携した支援」という意味で、骨粗鬆症の領域で世界共通に使用されている用語である。

骨粗鬆症は予防と治療が可能だが、加齢とともに有病率が高まるため、高齢者人口が増加すると患者数は増加する。また、高齢者になるほど骨折による日常生活動作の障害が強く、自立した生活を送ることが困難となり、介護が必要となる。最近の疫学データでは、欧米の国々では骨粗鬆症による骨折の代表といえる大腿骨近位部骨折の発生数が少なくなってきたことが示されている。この理由は色々考えられるが、骨粗鬆症の知識と予防および治療の普及によるところが大きいと考える。わが国においても、1995年から2015年までの20年間に、大腿骨近位部骨折の年齢別の発生率は、60～70歳代では男女とも明らかに低下してきた。しかし、80～90歳代の男女では増加しており、これが大きな問題である。

骨粗鬆症では一度骨折を生じると、次々に骨折を生じるようになる。骨折を起こして入院した患者さんを対象にした「リエゾンサービス」の活動を最初に始めたイギリスやオーストラリアでは、実際にこの活動により次の骨折の発生が低下することが報告されている。

このような状況の中で日本骨粗鬆症学会は、骨折して入院された方々だけでなく、地域、診療所、病院など様々な場面において、骨粗鬆症およびその予備軍である方々を対象とした「骨粗鬆症リエゾンサービス」を行うことが骨折リスク低下に不可欠な活動として位置付け、2012年に多職種を対象としたレクチャーコースを開始し、2014年から「骨粗鬆症マネージャー」の資格認定を始めた。

本書は、「骨粗鬆症リエゾンサービス」の趣旨、内容、役割を解説する目的で2013年の10月に発刊され、今回、改訂版を上梓した。当初は支援活動の内容について必ずしも明確でないところもあったが、この3年間の現場における経験を踏まえ、リエゾンサービスの内容がより具体的になってきた。本書が、骨粗鬆症の骨折予防の支援活動に興味を持つ、多くの皆さんのお役に立つことを願っている。

2016年9月

医療法人財団青葉会 青葉病院顧問 /

日本骨粗鬆症学会骨粗鬆症リエゾンサービス委員会 委員長

中村 利孝